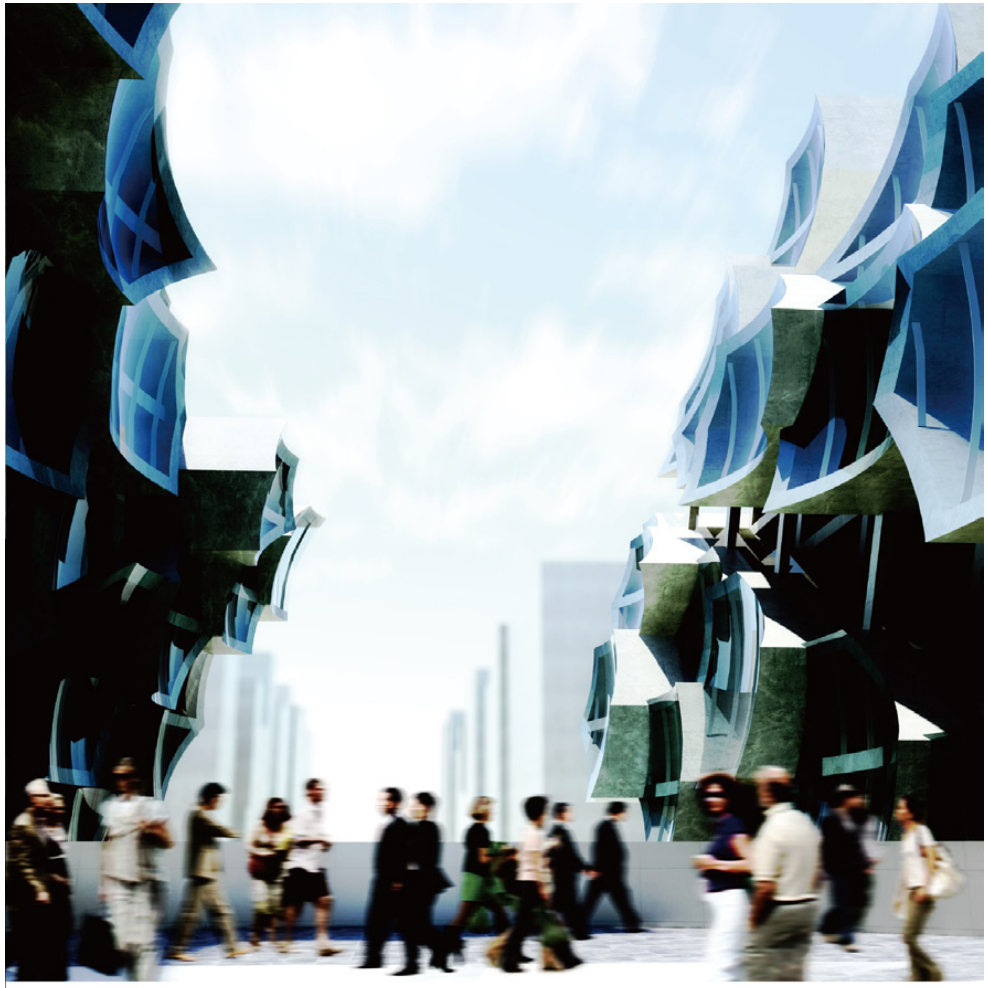


近年の PC やデジタルオーディオプレーヤーなどの普及によって音楽は手軽に楽しむことができるようになった。

もはや音楽は日常生活の一部となり、誰もが思い思いの音楽を持って暮らしている。

一方でまちはといえば地域とのつながりを断ち閉じこもろうとしていて、うるさくしようものならそこに居られなくなってしまう。

ライブハウスやスタジオなど、実際に行われている音楽は音を外に漏らさないように周囲の狭い中で行われているのが現状である。

私たちは日常生活の一部にまでなった音楽を、表層のみしか知らないで都合よく利用してしまっているのではないだろうか。

街ゆく人が豊かな生の音楽に触れることができないだろうか？

音楽家たちが思いのままに音を奏でることができないだろうか？

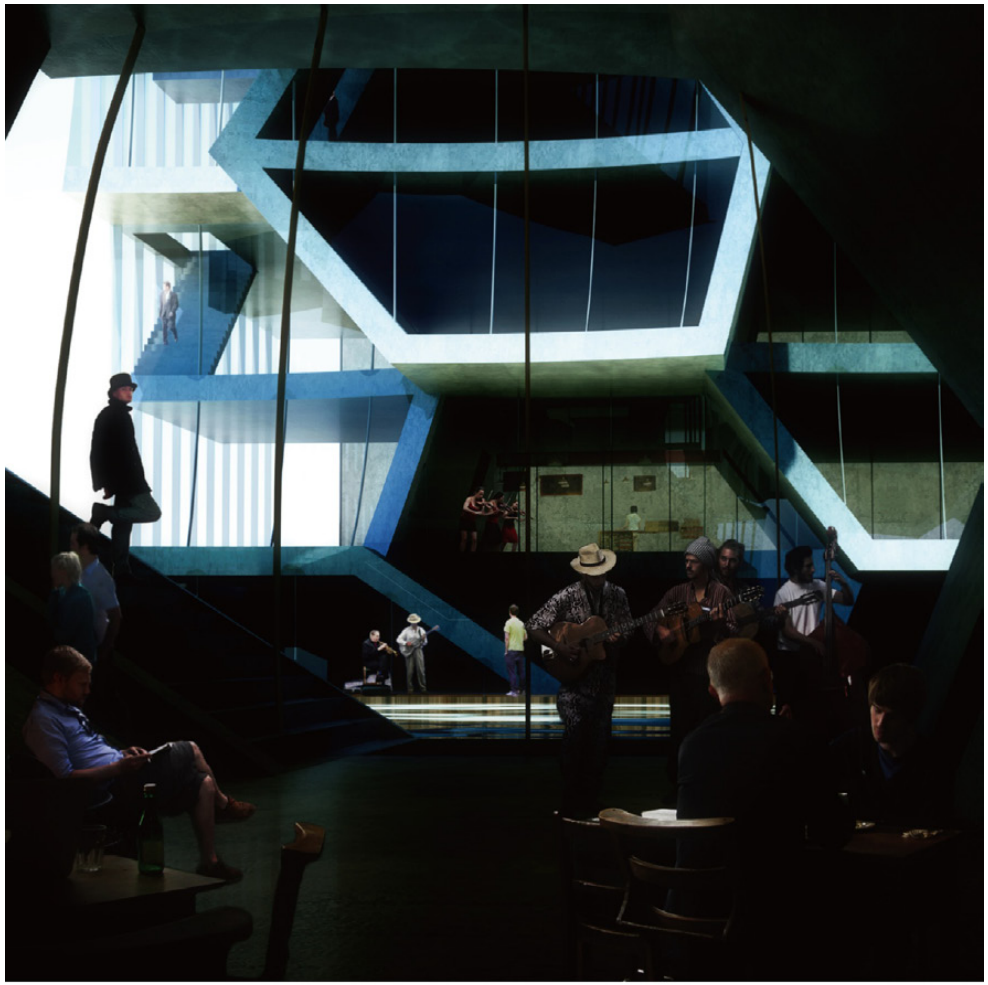
ここ大阪道頓堀は食い倒れの街として知られ、昼夜を問わず老若男女多くの人々が行き交いそれぞれの時間を過ごす。

人と話す声や店の呼び込み、大型モニターの音などその喧騒はまちの雰囲気となり道頓堀らしさとなっている。

この道頓堀と集まる人々のにぎやかさに乗じて、のびやかでおおらかな気持ちで音楽ができるような場所をつくる。

音楽家や街ゆく人が集まり、豊かな音楽で満ち溢れる。

音の巣窟を。



敷地：大阪府大阪市中央区道頓堀

区域区分：市街化区域

用途地域：商業地域

容積率・建蔽率：1000%・80%

接道関係：東側は幅 13m の戎橋
西側は幅 43m の国道
南側の道路は幅 13m の道頓堀商店街
北側は幅 9m の宗右衛門町通り

周辺状況：

南北は戎橋筋商店街と心斎橋筋商店街、東西は堀を挟んで道頓堀商店街や宗右衛門町通りが走り、南の戎橋商店街の先に南海や地下鉄の難波駅、西の浪町には JR の難波駅やなんば Hatch がある。

また宗右衛門町は町の再興の一環で、景観整備として石畳の復活や建て替えの促進、電柱の地中化などの計画を行っている。

日が落ちると、ネオン看板とたくさんの街ゆく人々のにぎわいで道頓堀独特の雰囲気になる。

設計主旨：

音楽は人と人とのコミュニケーションである。音楽を通して人は人の心に衝撃を与え、与えられる。その衝撃によって心の何かが変わる。心に形があるとすればその最初の変形は受動的な凹型であろう。変形した心の一部は相手に開かれ露出する。

この関係を道頓堀を挟んで向かい合う 2 つの巣に置き換える。

ここではある音楽に関わる機能を持つ空間を音楽家たちの巣と呼ぶこととする。

今、堀の向こうには同じ割面をもつ巣が見える。その奇妙な体験によって人は何かを感じ、心の形が変わる。それに反応して巣も変形する。こちら側の空間は向こう側の空間にえぐられる。また同様にして向こう側の空間はこちら側の空間にえぐられる。

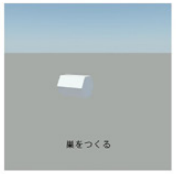
つまりここでは空間どうしが互いにえぐり、えぐられることで反応し合う。

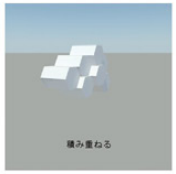
えぐり、えぐられた部分は相手に向かってその中身を露出する。露出した中身はえぐられた岩のようにつやを放つ。

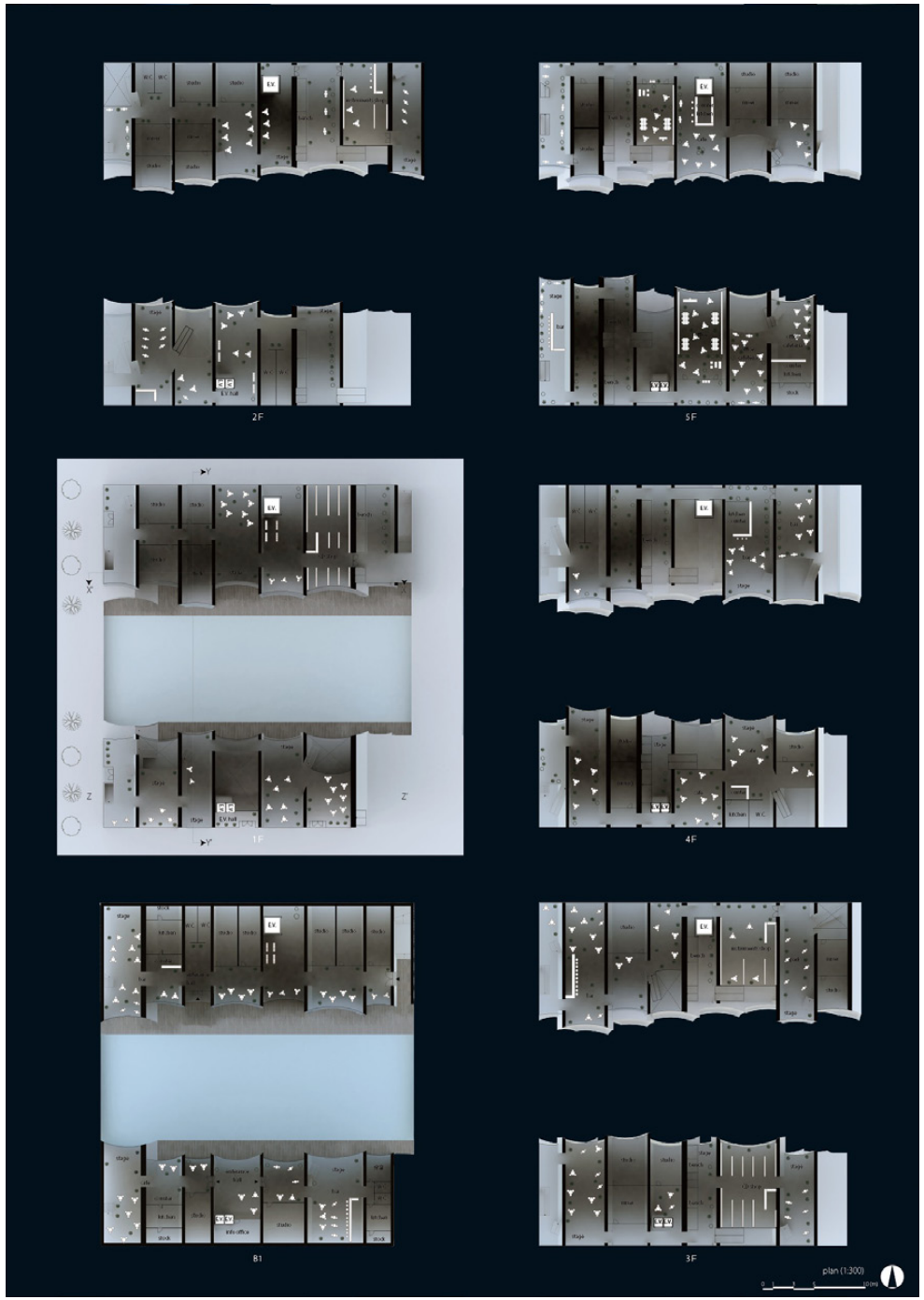
こうして次々と反応を終えた音楽家たちの巣は内部空間をぎらぎらと露出させ、道頓堀を挟んで谷のような空間をつくりだす。

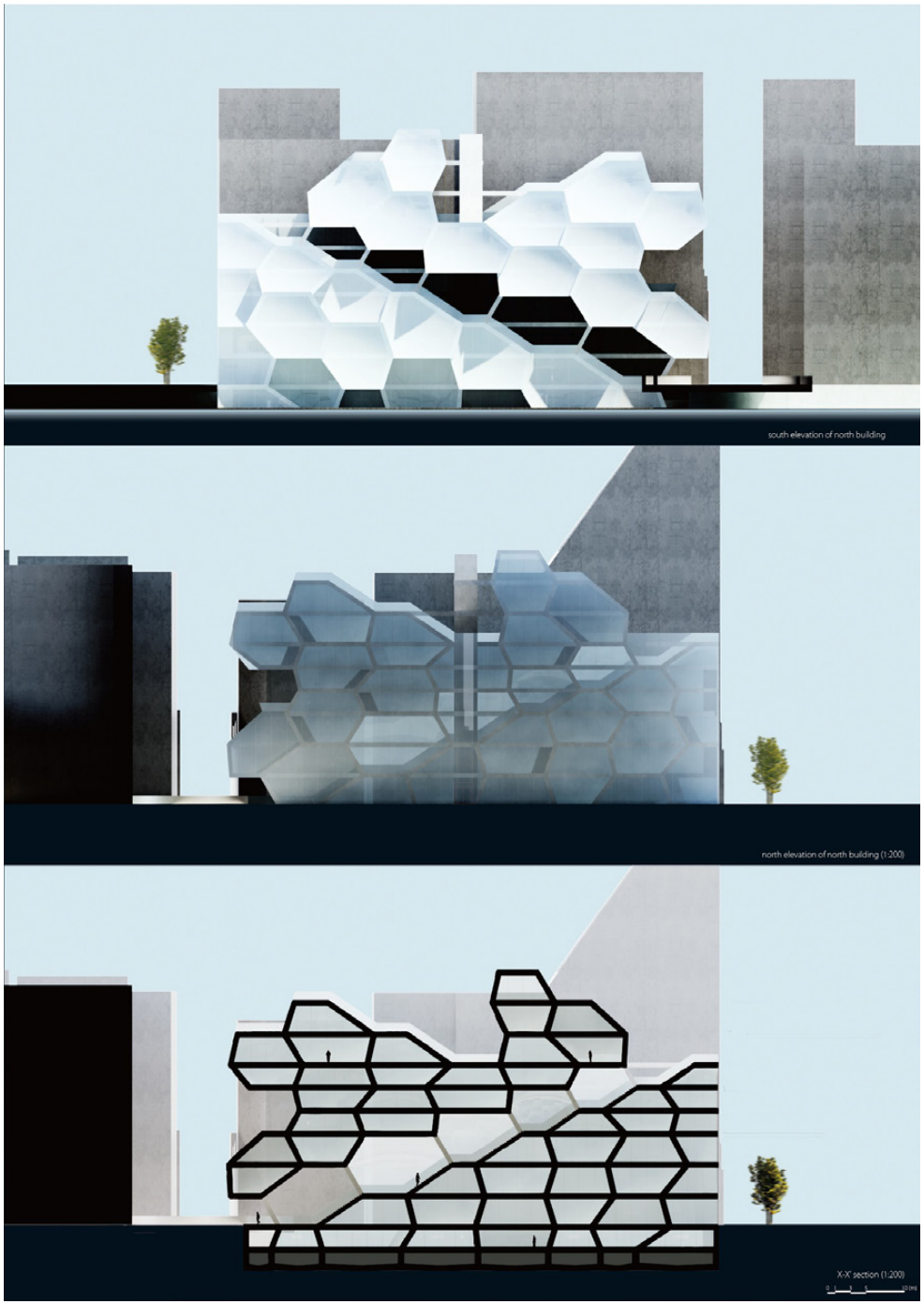
またそれぞれの巣がずれて積み重なっていることによって不均質な形や明るさ、奥行きを持つ多様な空間をつくることができる。

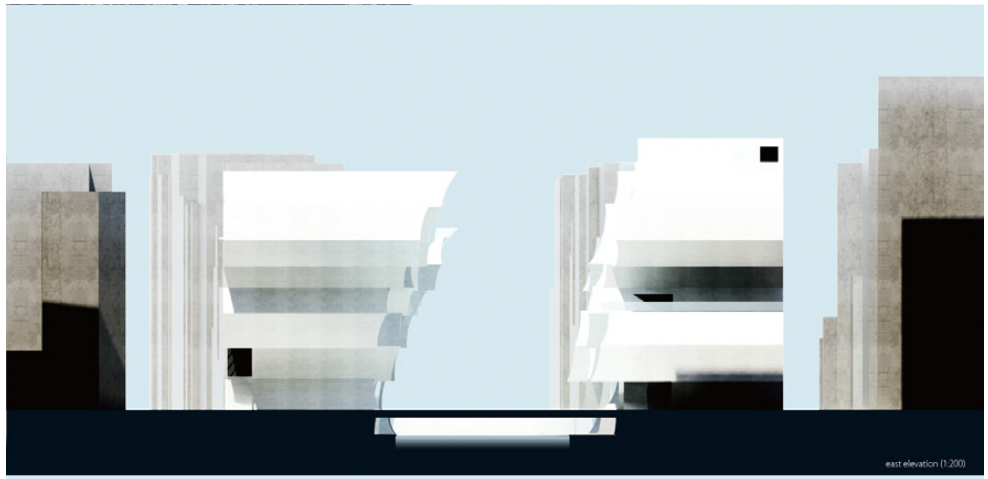
多様な音楽家たちの多様な巣が集まり、この谷は音楽家たちの巣、言わば音の巣窟となる。

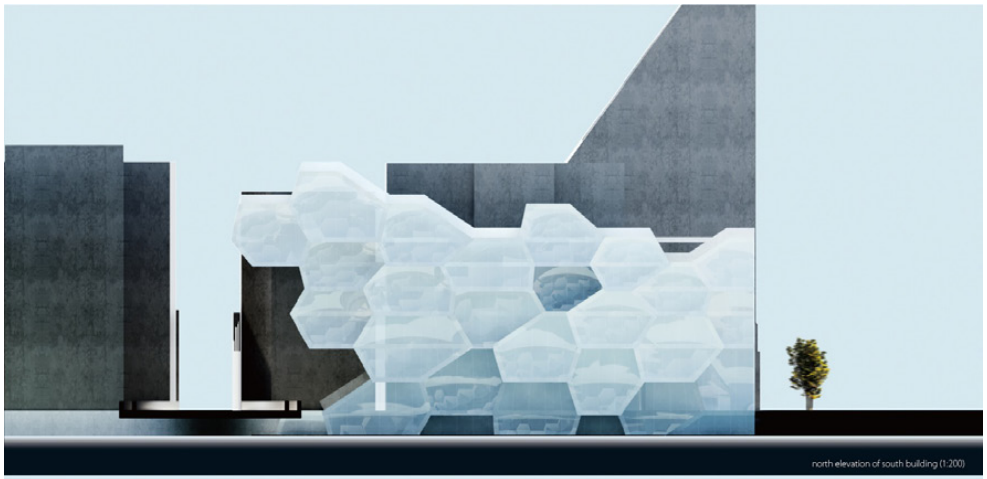


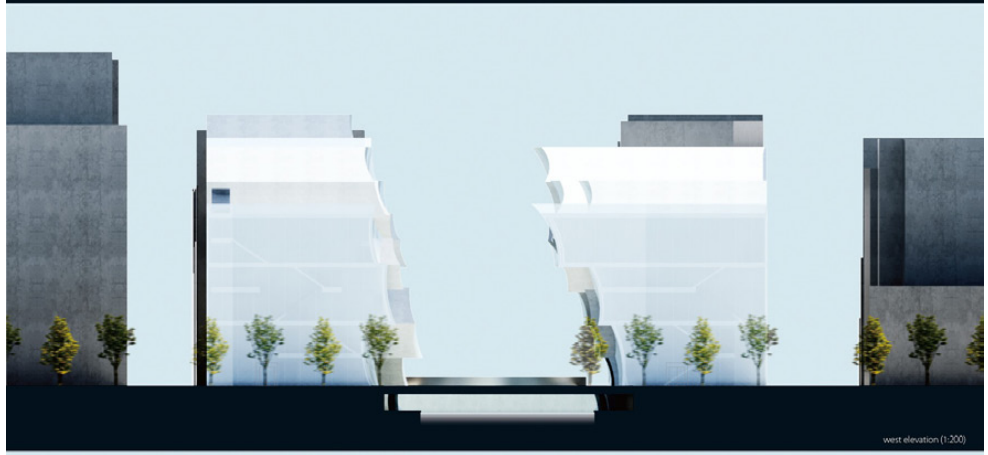


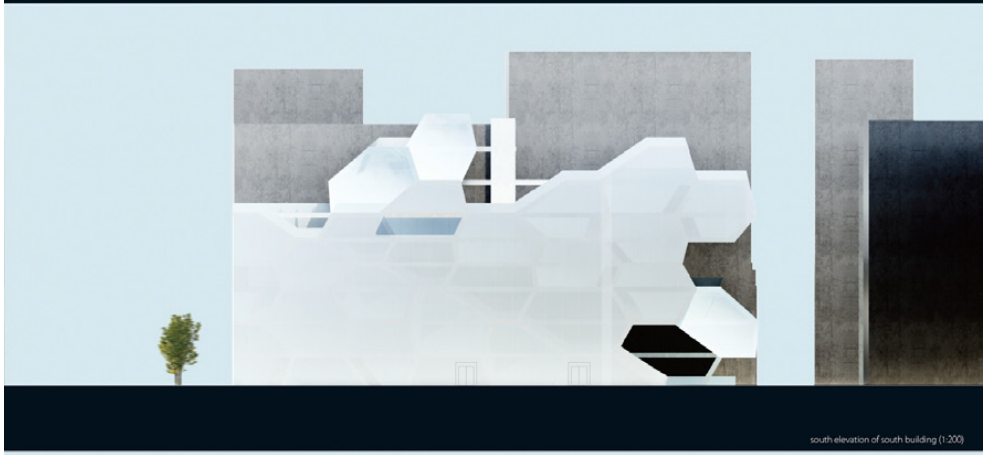

2F
5F
1F
4F
B1
3F
plan (1:300)

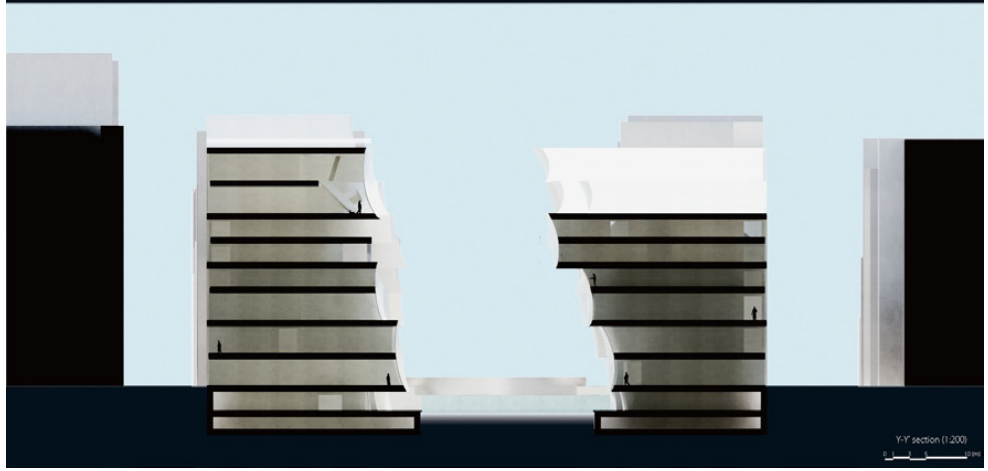

south elevation of north building
north elevation of north building (1:200)
X-X' section (1:200)

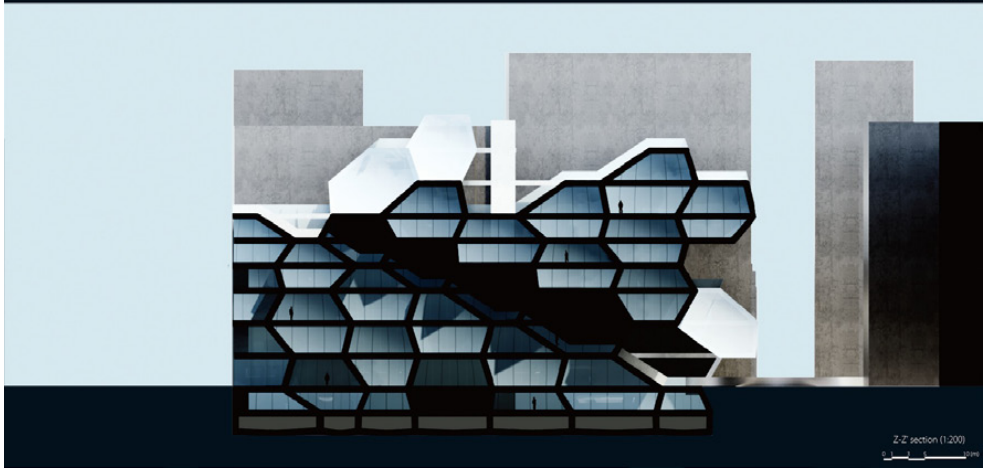

east elevation (1:200)


north elevation of south building (1:200)


west elevation (1:200)


south elevation of south building (1:200)


Y-Y' section (1:200)


Z-Z' section (1:200)